秋期福音特別集会（1）（京都）

大バビロンの滅亡
――ヨハネ黙示録第17～18章――

１９８４年11月24日
小池辰雄

詩で第三次戦争をくい止めたい　大淫婦の審判　七つの頭と十の角　ローマ皇帝　投げ込みとぶっ倒れは同じこと　一の言語　全体主義はダメ　バビロンの二の舞　出我　しょっちゅう空気の中に　罪と義の交換　魂を売る　百行一死に如かず　世界は滅びたり

【ヨハネ黙示録17】

1七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり我に語りて言う『来れ、われ多くの水の上に坐する大淫婦の審判を汝に示さん。2地の王等は之と淫をおこない、地に住む者らは其の淫行の葡萄酒に酔いたり』3斯て、われ御霊に感じ、御使に携えられて荒野にゆき、緋色の獣に乗れる女を見たり、この獣の体は神を瀆す名にて覆われ、また七つの頭と十の角とあり。4女は紫色と緋とを着、金・宝石・真珠にて身を飾り、手には憎むべきものと己が淫行の汚とにて満ちたる金の酒杯を持ち、5額には記されたる名あり。曰く『奥義大いなるバビロン、地の淫婦らと憎むべき者との母』6我この女を見るに、聖徒の血とイエスの証人の血とに酔いたり。我これを見て大いに怪しみたれば、7御使われに言う『なにゆえ怪しむか、我この女と之を乗せたる七つの頭、十の角ある獣との奥義を汝に告げん。8なんじの見し獣は前に有りしも今あらず、後に底なき所より上りて滅亡に往かん、地に住む者にて世の創より其の名を生命の書に記されざる者は、獣の前にありて今あらず、後に来るを見て怪しまん。9智慧の心は茲にあり、七つの頭は女の坐する七つの山なり、また七人の王なり。10五人は既に倒れて一人は今あり、他の一人は未だ来らず、来らば暫時のほど止まるべきなり。11前にありて今あらぬ獣は第八なり、前の七人より出でたる者にして滅亡に往くなり。12汝の見し十の角は十人の王にして未だ国を受けざれども、一時のあいだ獣と共に王のごとき権威を受くべし。13彼らは心を一つにして己が能力と権威とを獣にあたう。14彼らは羔羊と戦わん。而して羔羊かれらに勝ち給うべし、彼は主の主、王の王なればなり。これと偕なる召されたるもの、選ばれたるもの、忠実なる者も勝を得べし』15御使また我に言う『なんじの見し水、すなわち淫婦の坐する処は、もろも

ろの民・群衆・国・国語なり。16なんじの見し十の角と獣とは、かの淫婦を憎み、之をして荒涼ばしめ、裸ならしめ、且その肉を喰い、火をもて之を焼き尽くさん。17神は彼らに御旨を行うことと、心を一つにすることと、神の御言の成就するまで国を獣に与うることとを思わしめ給いたればなり。18なんじの見し女は地の王たちを宰どる大いなる都なり』

【ヨハネ黙示録18】

1この後また他の一人の御使の大いなる権威を有ちて天より降るを見しに、地はその栄光によりて照されたり。2かれ強き声にて呼ばわりて言う『大いなるバビロンは倒れたり、倒れたり、かつ悪魔の住家、もろもろの穢れたる霊の檻、もろもろの穢れたる憎むべき鳥の檻となれり。3もろもろの国人はその淫行の憤恚の葡萄酒を飲み、地の王たちは彼と淫をおこない、地の商人らは彼の奢の勢力によりて富みたればなり』

4また天より他の声あるを聞けり。曰く『わが民よ、かれの罪に干らず、彼の苦難を共に受けざらんため、その中を出でよ。5かれの罪は積もりて天にいたり、神その不義を憶え給いたればなり。6彼が為しし如く彼に為し、その行為に応じ、倍してこれに報い、かれが酌み与えし酒杯に倍して之に酌み与えよ。7かれが自ら尊び、みずから奢りしと同じほどの苦難と悲嘆を与えよ。彼は心のうちに「われは女王の位に坐する者にして寡婦にあらず、決して悲嘆を見ざるべし」と言う。8この故に、さまざまの苦難一日のうちに彼の身にきたらん、即ち死と悲嘆と饑饉となり。彼また火にて焼き尽くされん、彼を審きたもう主たる神は強ければなり。9彼と淫をおこない、彼とともに奢りたる地の王たちは、其の焼かるる煙を見て泣きかつ歎き、10その苦難を懼れ、遙かに立ちて「禍害なるかな、禍害なるかな、大いなる都、堅固なる都バビロンよ、汝の審判は時の間に来れり」と言わん。11地の商人かれが為に泣き悲しまん、今より後その商品を買う者なければなり。12その商品は金・銀・宝石・真珠・細布・紫色・絹・緋色および各様の香木、また象牙のさまざまの器、価貴き木、真鍮・鉄・蛎石などの各様の器、13また肉桂・香料・香・香油・乳香・葡萄酒・オリブ油・麦粉・麦・牛・羊・馬・車・奴隷および人の霊魂なり。14なんじの霊魂の嗜みたる果物は汝を去り、すべての美味、華美なる物は亡びて汝を離れん、今より後これを見ること無かるべし。15これらの物を商い、バビロンに由りて富を得たる商人らは其の苦難を懼れて遙かに立ち、泣き悲しみて言わん、16「禍害なるかな、禍害なるかな、細布と紫色と緋とを著、金・銀・宝石・真珠をもて身を飾りたる大いなる都、17斯くばかり大いなる富の時の間に荒涼ばんとは」而して凡ての船長、すべて海

をわたる人々、舟子および海によりて生活を為すもの遙かに立ち、18バビロンの焼かるる煙を見て叫び「いずれの都か、この大いなる都に比ぶべき」と言わん。19彼等また塵をおのが首に被りて泣き悲しみ叫びて「禍害なるかな、禍害なるかな、此の大いなる都、その奢によりて海に有てる人々の富を得たる都、かく時の間に荒涼ばんとは」と言わん。

20天よ、聖徒・使徒・預言者よ、この都につきて喜べ、神なんじらの為に之を審き給いたればなり』

21ここに一人の強き御使、大いなる礪臼のごとき石を抬げ海に投げて言う『おおいなる都バビロンは斯のごとく烈しく撃ち倒されて、今より後、見えざるべし。22今よりのち立琴を弾くもの、楽を奏するもの、笛を吹く者、ラッパを鳴す者の声なんじの中に聞こえず、今より後さまざまの細工をなす細工人なんじの中に見えず、礪臼の音なんじの中に聞こえず、23今よりのち燈火の光なんじの中に輝かず、今よりのち新郎・新婦の声なんじの中に聞こえざるべし。そは汝の商人は地の大臣となり、諸種の国人は、なんじの咒術に惑され、24また預言者・聖徒および凡て地の上に殺されし者の血は、この都の中に見出されたればなり』

●詩で第三次戦争をくい止めたい

この数年、不思議なことに、エレミヤ、イザヤと非常に大事なところを連続してやって参りまして、今年は、イザヤ書に一番応えるところのヨハネ黙示録をやっているわけです。旧約と新約の最高峰を我々はかいま見てきたわけです。黙示録の最後の数章を今度はやるということは非常に私には不思議でしょうがない。やはりこれは大きなカイロスに来たなと思う。

来年から、私は本当に生命賭けで詩を書きます。これは私の生活の第一義です。そのためには一切の犠牲を払わなければならない。だてに詩を作るのではない。私の悲願は、

「この詩で第三次戦争をくい止めたい」

と思うくらいの気持でいたします。皆さんも、どうぞ、それぞれの使命において相呼応して進んでいただきたいと存じております。

「12」という数は聖書の完全数を表す。天の「3」と地の「4」――3×4は12――天地相組み合わせたところの渾然たる数です。そういうわけで、私も来年から12年かかって詩を書きます。それが出版されるのは、いろいろ推敲したりしますから、それからなお二、三年後になると思いますが。とにかく、12年と大体見当ずけております。どこで私は仆れるか知りませんし、また、世界がどうなるか知りませんけれども。神さまに本当にそういった預言的な使命を担った詩を、この詩人でも何でもない者が作らせられるということは…（異

言）…。私は全身が涙であり、全身が炎です。そういうことで立ち向かいますので、皆さん、どうぞ、祈りをもってまたご支援いただきたいと思います。

●大淫婦の審判

では、ヨハネ黙示録の17章に入ります。

1七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり我に語りて言う『来れ、われ多くの水の上に坐する大淫婦の審判（さばき）を汝に示さん。2地の王等は之と淫（いん）をおこない、地に住む者らは其の淫行の葡萄酒に酔いたり』

凄い内容が書いてある。「淫」という字はギリシア語の「ポルネー」という字で、「ポルノ」という字はこのギリシア語から来ている。今、非常にそういうことが日常茶飯事のごとくにあって、しかもまた、テレビあたりでも相当そういった場面が出てくる。「大バビロン」はこの日本だ。特に東京が中心でしょうけれども。これから読むところは日本に対する警告だと、私はひしひしと感じます。また、それはひいては世界に対する警告でもあります。17～18章のところは地獄への道です。19章からは、それから逆転して天界に行く。ダンテが「地獄篇」と「天国篇」を書きましたが――まん中に「煉獄」がありますけれども――ダンテの詩も本当に世界の現実を叙しかつまた預言しているような詩です。

「神さまに対して地上の享楽に心を委ねること」

これが「淫」であります。また、

「偶像に対する礼拝、偶像崇拝」

これも「淫」です。要するに、

「神に非ざるものを神としたり、また自我中心の地上の目の慾、肉の慾、持ち物の慾」

そういったようなものは全部、「淫」「ポルネー」という言葉で表されるわけです。「ポルネー」の事態は、これは即ち

「地獄への道、亡びへの道」

です。ところが、今本当に神を神としていない。かつて、私の恩師の藤井先生が、

「北の熊と東の鷲」

というような言い方だったと思いますけれども、

「唯物主義と享楽主義との二つが世界を今覆っている。大変なことだ。目覚めよ」

ということで、イザヤ書60章あたりで、非常に日本のために憂えた文字を書いてます。日本の現状をみて、

「滅びよ！」

という逆説的な詩まで書かれた。今は、藤井先生や内村先生がその当時感じた以上の現実になっているので、天界で非常に憂えておられると思います。

私は、黙示録の妙ないろいろな言い方を

「これはどういうことだ」
なんていう解釈の仕方は他の人に任せます。

1……『**来(きた)れ、われ多くの水の上に坐する大淫婦の審判(さばき)を汝に示さん。**

「水」というのは民族の洪水というようなことです。例えば、イザヤ書8章を見ると、民族のことを「水」に例えた言い方がありますので、そのように考えられていいと思います。「大淫婦」とはサタンのこと。サタンとそのサタンの手下たち、サタンに捕らわれた者たちです。

2**地の王等は之と淫(いん)をおこない、地に住む者らは其の淫行の葡萄酒に酔いたり』**

今は「王」というのはあまりいない。「キング」というような言い方でいわれるのは、もうイギリスの他にちょっとあるくらいなものでしょう。要するに支配者です。

「皇帝崇拝か、神を崇めるか」

ということで、初代キリスト教徒は非常にそこではっきりと自分の信仰をあらわして、迫害にあったことは御承知の通りと思います。1世紀から3世紀のあたりです。有名なポリュカルポス（69年頃～155年頃）なんていうのはその代表的な殉教者です。

この場合、密かに言っているのは当時のローマ及びローマ帝国のことです。ヨハネにとっては、「ローマ」の代わりに「バビロン」という言い方をしている。我々にとっては、この東京なり、ロンドンなり、ニューヨークなり――どこでもいい――とにかく、大都会がこの「バビロン」なんです。そういった一つの固有名詞も普通名詞みたいになってしまうわけです。

●七つの頭と十の角

3**斯て、われ御霊に感じ、御使に携えられて荒野にゆき、緋色(ひいろ)の獣に乗れる女を見たり、この獣の体は神を瀆す名にて覆(おお)われ、また七つの頭(かしら)と十の角(つの)とあり。**

「七つの頭と十の角」というのは、良い場合にも使うので、ここでいうのは偽りの「七」です。「神を瀆す名」とはどんな名だか知りませんが、それで覆われていたという。身体を神の名で、キリストの名で記していると傷を受けない、というような話があります。ところが、ある一箇所がその名を書いてなかったためにそこに傷を負ったという話は、それの逆ですけれども。我々はなにも書かなくても、書かれざるところの御名を身に帯びていなければならないわけです。

中国では「緋色」や「紫色」というのは神聖な祝福された色なんですけれども、ここではそうでない。聖なるものが全く逆用されている――まだ他にも出てきますけれども――そういうことであります。

4**女は紫色(むらさき)と緋(ひ)とを著(き)、**

ここにも出ている。紫色も神々しい色なんです。

金・宝石・真珠にて身を飾り、
これも天国の方にも出てきますが、
手には憎むべきものと己が淫行の汚とにて満ちたる金の酒杯を持ち、
「憎むべきもの」とは偶像のこと。「荒らす憎むべきもの」という言い方がダニエル書に出てきます。預言者たちがいかに人が造った偶像を――もう出エジプトの時から金で牛を造って拝んだりして、モーセが非常に怒ったわけですが――偶像崇拝と享楽主義を憎んだか。
5 **額には記されたる名あり。曰く『奥義大いなるバビロン、地の淫婦らと憎むべき者との母』**
これは原文でも特に大文字で書いてある。これが非常な標語になっているわけです。「母」というのは非常に大事な存在なんですが、「大いなるバビロン」は「地の淫婦らと憎むべき者との母」、即ち、享楽主義と偶像主義の母であるということ。要するに、偶像崇拝からそういうことになる。
「人間は造られたるものによってまた支配される」
というようなことが西田哲学でも出てきますが、正に宗教の世界でもそういうことになる。
6 **我この女を見るに、聖徒の血とイエスの証人の血とに酔いたり。我これを見て大いに怪しみたれば、**7 **御使われに言う『なにゆえ怪しむか、我この女と之を乗せたる七つの頭、十の角ある獣との奥義を汝に告げん。**
こういう御使とヨハネとの問答が、対話が非常に生き生きと出てきますが、真理の表現は――プラトンの『対話篇』は典型的なもので、プラトンは本当は劇詩人と言ってもいいくらいな素晴らしい哲学者ですが――よく対話で表現される。
8 **なんじの見し獣は前に有りしも今あらず、後に底なき所より上りて滅亡に往かん、地に住む者にて世の創より其の名を生命の書に記されざる者は、獣の前にありて今あらず、後に来るを見て怪しまん。**
「生命の書に記される者は世の創より」という言い方はエペソ書1章に出ている。パウロは別なところでも言ってますけれども。エレミヤにも出てくる。
「御前にて潔く瑕なからしめん為に、世の創より我等をキリストの中に選び、御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり。」（エペソ1・4～5）
いわゆる「選び」の思想というのはこういうところから出てくるけれども、選びの意味はこちら側には何もない。神の一方的な選びです。選ばれたる者は責任と光栄を持っています。必ず責任がある。選ばれて、もし責任を感じなかったならば、その選びから落ちると、今度は行きどころがなくなる。今の若い人が自由とか自主とか言うけれども、責任観念が非常にうすい。言論の自由なんて言ったって、自分が発する言葉に対して本当の責任を持たない勝手なものはとんでもない民主主義です。

●ローマ皇帝

9 **智慧の心は茲（ここ）にあり、七つの頭は女の坐する七つの山なり、また七人の王なり。**

これはローマがそうです。「七丘の都」という。「七人の王」とは七代のローマの皇帝のことを数えたわけです。数え方は学者によっていろいろのようです。シーザー、それからキリストが出た時の皇帝であるアウグストゥス。それからティベリウス、これも非常に猜疑心の強い嫌なやつです。カリグラ、これは非常に暴君で、臣下に殺される。クラウディウス、これはなかなか勇ましい王で、ヨーロッパを席巻したような王です。その次は一番悪いやつで、ネロです。七番目は、あと三人ほどいるが、一番後のドミティアヌスというのを数えるのが一番いいかと思う。シーザー、アウグストゥス、ティベリウス、カリグラ、クラウディウス、ネロ、そしてドミティアヌスの七人が紀元前30年頃から紀元90年頃の間ですから、それだけの間を特にその「七人の王」と考えていいのではないかと思います。

しかし、その後で立派な王様が出てくる。それはネルヴァ、特にトラヤヌスという王様の時に、ローマは良い意味おける善政時代になる。それから、ハドリアーヌス、ティウス。それからアウレリウス、これは有名な非常に哲学的な王様で、著書に『冥想録』というのがある。ネルウァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、ピウス、アウレリウス。この五人が、95年頃から180年頃までの間のローマの善良な皇帝です。

悪いやつが七人いた。「悪い」と言ったって、中には悪くないのもいる。アウグストゥスは決して悪くはない。シーザーもそう悪いとはいわないけれども、後の五人はけしからん。紀元1世紀から2世紀にかけて迫害が非常に行われた。それがヨハネ黙示録の背景になっている。そういった悪い王様が、偶像崇拝、ポルネー、それから迫害をした。だから、「大いなるバビロン」は「地の淫婦らと憎むべき者との母」であるという。これは同格です。

6 **我この女を見るに、聖徒の血とイエスの証人の血とに酔いたり。**

とあるでしょ。いかに迫害したかということは、この簡単な文句であるわけです。特にユスティヌスは165年に亡くなっていますが――ヨハネはいない時でしょうね、ヨハネはそれは知らないでしょう――ユスティヌスは教父時代の有名な殉教の伝道者です。

偶像の中には「モロク」というのが――あるいは「モレク」ともいいますが――人身御供をするのが相変わらずあったらしい。これはユダヤの終りの頃から出てきているものです。「ケモシュ」はモアブ人の偶像です。「アシュタロテ」はフェニキア人の偶像で女神です。これはソロモンが入れた。これらの偶像が具体的な名前といっていいでしょうね。

10 **五人は既に倒れて一人は今あり、他の一人は未だ来らず、来らば暫時（しばし）のほど止（とど）まるべきなり。**

というような預言をしている。それで七人というわけです。

11 **前にありて今あらぬ獣は第八なり、前の七人より出でたる者にして滅亡（ほろび）に**

往くなり。

「獣」というのは王様のことですよ。「第八」の獣というのがドミティアヌスです。在位は51年から96年です。これは滅亡の象徴みたいなやつだ。

12 汝の見し十の角は十人の王にして未だ国を受けざれども、一時（ひととき）のあいだ獣と共に王のごとき権威を受くべし。13 彼らは心を一つにして己が能力（ちから）と権威とを獣にあたう。14 彼らは羔羊（こひつじ）と戦わん。而して羔羊かれらに勝ち給うべし、彼は主の主、王の王なればなり。これと偕なる召されたるもの、選ばれたるもの、忠実なる者も勝（かち）を得べし』

「勝を得べし」は原文になく、日本語として付け加えただけだ。どんなにサタンの力が強くあろうとも、それよりもはるかに強いのはキリスト、

「主の主、王の王」

です。「ザ・キング・オブ・キングズ」という言葉はここから来たわけですが、支配者中の支配者、これが本当の支配者ということです。

「主に召されたるもの、選ばれたるもの」

とはキリスト者のことです。ギリシア語では「召されたるもの」は「クレートイ」、「選ばれたるもの」は「エクレクトイ」。

「エクレシア」

という字がこの「選ばれたるもの」という字です。「忠実なるもの」は「ピストイ」という。これはみな複数です。

聖書は二千年前の人々に具体的に語られたのと同時に、現実に我々に語りかけているものである。我々は現にキリストにあって勝っているんです。「勝てるだろうか」ではない。勝っているんです、また勝ちつつある。

●投げ込みとぶっ倒れは同じこと

藤井先生はよく我々に

「信頼」

ということを仰いました。けれども、「信頼」という言葉が、どうも人間の側からの信頼というように響いて――その時は大いにそれで私はいい気持になっていましたけれども――力が本当の意味では来ていない。先生は本当に信頼生活をなさいました。先生を批判しているわけではない。けれども、「信頼」が「こちら側のなにか由り頼み」というような心理的なものであってはダメなんです。もっと乱暴な意味で、

「投身、投げ込み」

です。こっち側にいて相手に信頼している、ということではない。

「信頼も不信頼も何もない。ただ私はあなたの中に自分を投げ入れます」

ということ。私はどうしても福音はこの角度だと、この次元だと思っている。投げ込みです。投げ込むというと、本当に無我の我が燃えるんです。とにかく、現実に力が来て、現実に火が燃えていなければダメなんです。それは上から必ず来る。待っているのではない。こちら側から投げ込む。あるいはぶっ倒れると言ってもいい。

「とても投げ込めません。私はここにぶっ倒れます」

と。結構です。ぶっ倒れると、キリストが起こしてくださる。そこに力がくる。投げ込みとぶっ倒れは同じことです。そういう気合が分かりますか。

投げ込み、ぶっ倒れというのが本当に自分を問題としていない姿です。

「自分を問題としていない」

ということが

「無者」

ということです。そこに無限無量の力がやってくる。嵐がきても消えないところの火が燃える。どんなに行き詰まったように見えても、絶対に行き詰まりません。ありがたいね、本当にありがたいね。あなた方は若いから、この秘義を掴んでしまったら、もぅ大変なことになるよ。私みたいに80歳になってやっと言っているようなのと違うんだから。私なんか乗り越えてどんどん進んでくださいよ。

そういう気合に――気合というとおかしいけれども――現実に入ると、本当に自分が召されたる者であり、選ばれた者であるということが分かる。全然こちら側ではない。神さまの一方的な選びであり、捕まえであり、呼びかけである。もぅ、私は異言が出そうで困る。サタンには勝ちますよ、それはキリストが勝ったから。キリストが勝って、その勝利をいただくのだから。キリストは荒野でサタンと一騎打をして勝ったのだから。

「私の恵みというのはこの荒野の一騎打の勝利だよ。これをそのままやるよ」

ということです。もぅ、言葉はないではないですか、平伏すだけではないですか。そこで平伏してごらん、もの凄い力がくるから。

まだ、みんなどうも――みんなと言ったらわるいけれども――大体が、信仰が体裁なんだ。

「私の信仰は…」

なんてやっているから。こういう乱暴なことを言うものだから、私は嫌われるんです。仕方がない、嫌われても。私はいろいろな人の魂を祈りの中で、

「惜しいなぁ、何やっているんだろうなぁ」

と思っている。それこそ禅宗みたいに忽然として悟って、

「いやぁ、分かりました！」

と言って、本当は私のところにとんで来て飛びついてもらいたいんだ。

●一の言語

15 **御使また我に言う『なんじの見し水、すなわち淫婦の坐する処は、もろもろの民・群衆・国・国語（くにことば）なり。**

「水」が民を表す言い方はイザヤ書8章、エレミヤ記47章にもある。

16 **なんじの見し十の角と獣とは、かの淫婦を憎み、之をして荒涼（あれすさ）ばしめ、裸ならしめ、且その肉を喰（くら）い、火をもて之を焼き尽くさん。**

凄いことが書いてある。ローマという淫婦に例えられているポルネーの都、東京もそんなものだ。

17 **神は彼らに御旨（みむね）を行うことと、心を一つにすることと、神の御言の成就するまで国を獣に与うることとを思わしめ給いたればなり。**

不思議なことが書いてあるね。この世の文化は、富だとか権力だとか、そういった力でもって逆に自ら崩壊してしまうんです。力あるものは力で亡びる。

「剣（つるぎ）は剣で亡びる」

とキリストが言われたように。

18 **なんじの見し女は地の王たちを宰（つかさ）どる大いなる都なり』**

ちゃんとみな説明してあるわ。

「バビロン」というのは一番先に創世記11章に出てくる。バベルの塔です。「バーベール」というのはヘブライ語で、「バビローン」というのはギリシア語です。「乱れ、混乱」の意味です。奢り高ぶって天にまで登ろうとした。そうすると、それが混乱に陥らせられる。神ぬきに神の如くなろうとするのが、サタンの方向なんです。だから、人間の理想主義も――哲学では理想主義そのものは良いのだけれども――理想主義だけでは行き詰まる。人間のある限界にきて、そこからひとつ次元の違ったところに自分を入れないとね。でないというと、ひっくり返ってしまう。

「全地は一の言語一の音（ことば）のみなりき。」（創世記11・1）

「一の言語、一の音」というのは「一様の言葉」ということ。それは一つなら、いいではないですか。けれども、いわゆる全体主義的な一つでなくて、各民族が各々の言葉をもつということは結構なことなんです。ただ問題は、

「いろいろな言葉をもちながら、それが一つであるためには、言葉が一様ではなくして、その言葉の奥の言葉、言葉の本当の精神は一つでありたい」

ということです。そこまでは創世記では言ってませんけれども、私の神学的な解釈からいえば、そうなってくる。

例えば、音楽もそうでしょ。いろいろな音を発するが、しかし、その音楽はある一つの元の音からいろいろに多様性が出てくる。植物もそう、動物もそう。そういうような考え方をしたのがゲーテです。言葉はいろいろ雑多でもって、

「この言葉の方がいい」
とか、
「あっちの言葉の方がいい」
なんてことをやって喧嘩するのは「混乱」なんです。だから、
「一つの音であり一つの言語であるが、その一つというのは、そういった外側の一つではない」
ということを私は読みたい。ところが、それにこだわったので、「混乱させられた」ということになったわけです。

●全体主義はダメ

「エホバ言いたまいけるは視よ民は一にして皆一の言語を用う。今既に此を為し始めたり。然ば凡てその為さんと図維る事は禁止め得られざるべし。去来我等降り彼処にて彼等の言語を淆し互いに言語を通ずることを得ざらしめんと。」（創世記11・6～7）

妙なことを言っている。創世記11章というのは本当は何をいっているのか、分からない。一つならいいではないか、なぜこれをバラバラにしようとするのか、神さまの方が悪いではないか、と言いたくなるところです。しかしこれは、
「いわゆる全体主義でもって神の世界をのっとろうとするような文化はダメだ。むしろ、おのおの善さ、特種性多様性において大きな一つになるということが本当の世界だ。いろいろな動物がいるし、いろいろな植物があるし、いろいろな人種があるし、また、地理的にもいろいろな様々なものがある。そういった大きな多様性におけるところのハーモニー、調和、それが神の素晴らしい世界だ。神は、その点で本当に芸術家である」
と言いたいわけです。例えば、考えもみな同じ考えになったらダメなんです。即ち、何々主義とか、イデオロギーを押しつけるでしょ。共産主義だって何だっていいですよ、それぞれの真理性があるんだから。大いにそこでやってみたらいい。それでうまくなかったら、自分で改良したらいい。他に押しつけることはない。
「自分の所はこうやっているんだが、参考にしろ、良かったら使えよ」
と、それなら分かるけれども。
そういったような、お互いの在り方、考え方を尊重しながら、大きなハーモニーをなしていくためには、実は本当の一つを、根元、元をもたなければダメなんです。それからいろいろな主義主張、在り方、様々なものが出ていく。そして、使命はみな違う。親から出ている兄弟だってそうです、みな違うんだ。違うからいい。そして、間違いがない。みな神さまから来ていることを忘れて、これを切ってしまって、そこでもって一つになろうとな

んてすると、それはダメだということです。そんな全体主義はダメです。

●バビロンの二の舞

バビロンには紀元前20世紀頃にハムラビという有名な王様がいた。これはバビロン帝国の覇者です。ハムラビ法典というのはモーセの律法と比較すると非常に面白い。全盛期になったのはずっと後の紀元前6世紀、ネブカドネザルが現れた時です。非常に立派な王宮を造った。ユーフラテス河の東の方にあったのを、彼は更に増築して二倍に拡げた。河を越えて西の方にも南北東西に拡げた。これは黙示録の天のエルサレムと同じように正方形をなしていて、一辺の長さが120スタディオン、今でいうと約23キロメートルの大変な大きなものです。そういうばかでかいものを造った。そこにまたこの塔が聳えていたのだから大変なものだ。城壁の幅が約26メートル、高さが約103メートルあったと本に書いてあります。町のまん中にユーフラテス河が流れている。天のエルサレムにちょっと似たようなことが書いてある。そういう大きなバビロンが、しかしながら、マルドゥクの神を拝んで非常に偶像崇拝で、ポルネーの世界になってしまったから、これをひっくり返してしまえというわけです。ローマが正にそのバビロンの二の舞をやっているということになるわけです。

「クシ人」というのがあるでしょ。あれもやはりこちらの方にいたところの種族です。創世記10章に出てます。クシの族のニムロデというのがなかなか勢力家であった。これはみなセム人種です。紀元前747年、ナボポラッサルが独立し、731年頃にはティグラテ・ピレセルに征服され、またそれからいろいろ反乱が起きて、703年にセナケリブによってまたやっつけられて、紀元前680年にエサル・ハドンによって、また648年にはアーシュール・バニパールによって平定された。エジプトの王様のパロ・ネコに反対されて、ナボポラッサルは彼の息子のネブカデネザルをバビロンの利益の擁護のために送った。紀元前605年にネブカドネザルはネコをカルケミシュの戦いで完全に打ち破った。それでこれが王位について約50年間統治したということです。なかなか複雑な歴史を持っている。

要するに、バビロンはそういった勢力もあるし、いわゆる文化的にもかなり進んでいたということで、文化文明、権力、いろいろな意味において地上の力のある富んだ都である。今のローマがその通りだが、ちょうどそれで円熟してひっくり返るぞ、というわけです。

●出我

黙示録第18章に入ります。

1この後また他の一人の御使の大いなる権威を有ちて天より降るを見しに、地はその栄光によりて照らされたり。2かれ強き声にて呼ばわりて言う『大いなるバビロンは倒れたり、倒れたり、かつ悪魔の住家、もろもろの穢れたる霊の檻、もろもろの穢れたる憎むべき鳥の檻となれり。3もろもろの国人

はその淫行の憤恚（いきどおり）の葡萄酒を飲み、地の王たちは彼と淫をおこない、地の商人（あきうど）らは彼の奢（おごり）の勢力（ちから）によりて富みたればなり』

4また天より他の声あるを聞けり。曰く『わが民よ、かれの罪に干（あずか）らず、彼の苦難を共に受けざらんため、その中を出でよ。

「彼」というのはバビロンのことです。

5かれの罪は積もりて天にいたり、神その不義を憶え給いたればなり。

バベルの塔みたいに、奢りの罪です。ここで大事なのは、

「その中を出でよ」

という句です。アブラハムの出ウル、モーセの出エジプトです。出バビロニヤ、出東京ということ。一番大事な「出」は

「出我」

我を出ることです。本当に出我していれば、バビロンの中にいたっていい。

「小隠は山に隠れ、大隠は市（まち）に隠る」

という。大いなる隠者は町に居て、ポルネーの奴らを善導してしまう。文殊菩薩みたいに。

文殊菩薩が夏の修行のときに、紅灯の巷（ちまた）に行ってしまった。そして、そこで悪い遊びをしていた人たちを教化した。それは文殊にあるところの仏の力、如来の力です。大慈悲心、慈悲の光です。文殊が山に帰ってきた。「山の修行をみなやっているのに、お前はどこへ行ってきたか、けしからん、あいつをぶっ叩いてよいか」と問うた。「ああ結構だ」とお釈迦さんが言った。叩こうとしたら、その鞭がおりない。文殊の霊の力にうたれて、打とうとしても打てない。参った、お前は本ものだと。

「並いる者ことごとく文殊となれり」

と書いてある。文殊の慈悲の光にみな参ってしまった。

教育もそこまでいったら、もう最高のところです。それが教育の至道だ。至道無難の境地です。これが聖霊の愛の力です。あなた方は本当に聖霊を受ければ、そのことができる。だから、「その中を出でよ」というのは、

「お前の中から出ろ」

ということです。

「自分の中から、我を抜け出ろ。我無き我となれ」

ということ。ただ抜け出ただけではダメ。抜け出て、キリストの中に自分を入れてしまわなければダメです。

「われキリストの中に」

と、これが、

「エン・クリスト」

ということです。大変な言葉です、この「エン・クリスト」というのは。

「エイス・クリストン」「キリストの中へ」
と投げ込む。そうすると「エン・クリスト」という状態に入る。お母さんの懐の中に入ると、子供は安心するでしょ。だから、女の方は、若いお母さんは、
「ああ、これが本当の真理だ。私もキリストの中に入りましょう」
ということになる。

●しょっちゅう空気の中に

我々は空気の外へ出るわけにはいかん。どこを歩こうが、しょっちゅう空気の中にいる。また、空気を吸っている。空気と肉体とは完全に不可離の関係です。水は時々飲むけれども、空気は飲まなくたって、無意識に吸っている。
「水は H_2O である」
なんて言ったって、ちょっとも喉の渇きはなおりはしない。飲まなくては。何でも具体的な世界です。思われている世界ではない。ところが、思われた信仰がたくさんあるんだ、思われ信仰が。それを観念信仰という。悪くはないけれどもそれではダメなんだ。
「その中より出でよ」
は本当は、
「その中にいてもいい。ただ、お前の中から出よ」
ということです。そうしたら、町の中にいても、大隠者だからその町を変えていく。
「お前が光だから、闇の世界を光の世界に変えてしまうぞ」
と。この蛍光灯が消えたら、この部屋はまっくらになってしまう。この蛍光灯が光の世界にしているんだ。
「汝らは世の光なり」
というのは、
「私がお前の中に入って、光となるぞ」
ということ。一生懸命で頑張って我慢して、頭を剃って光ったってダメなんです。
「バビロン」といっても、「カルディア」といっても同じことです。ロトがソドムから出た。要するに、一番大事なのは出エジプト、出バビロニヤです。罪から贖われて、バビロニヤを出ました。艱難から救われて、エジプトを出ました。モーセは完全に神さまの中に祈り入って、モーセが手を挙げれば、紅海の水がグーッと別れてしまった。あの「十戒」という映画に出てくるね、大変なことだ。キリストの信仰の世界は、
「山がこっちからあっちへ移るぞ」
なんて、キリストがそういうことを居るからね。普通の我々の信仰なんてものは呑気な信仰だ。そんなものは本当は信仰でも何でもない。八方破れにならなければダメです。
「破れ」というのは本当は素晴らしい言葉なんだ。まだ身構えているからダメなんです。

「本当に破れ切ってみろ。そうしたら、もう光が満ち満ちるぞ」
と。実は、キリストの十字架で我々は破られているんです。
「お前の我執、自我というやつは、全部私の十字架で破ってしまった、贖いとった。あとは、受けとるのは聖霊だけだ」
と。だから、
「十字架と聖霊」
と私は言わざるを得ない。この関係を普通の牧師さんたちははっきり言わないんだ。

●罪と義の交換

6 **彼が為しし如く彼に為し、**
これはユダヤ的な言い方です。
その行為に応じ、倍してこれに報い、かれが酌み与えし酒杯に倍して之に酌み与えよ。
善きにつけ悪しきにつけ、返せと。それと同じことを、あるいはその倍のことをしろと。キリストが、
「一里行くことを強いたら、二里行ってやれ。上衣をとったら、下衣もやってやれ」
と言った。あれがこれなんです。出エジプト記21章の、
「人もし相争いて妊める婦を撃ちその子を堕させんに別に害なき時は必ずその婦人の夫の要むる所にしたがいて刑せられ法官の定むる所を為すべし。若害ある時は生命にて生命を償い、目にて目を償い歯にて歯を償い手にて手を償い足にて足を償い、烙にて烙を償い傷にて傷を償い打傷にて打傷を償うべし。」（出エ21・22～24）
これがドイツ語で「フェアゲルトゥングス・ゲダンケ」（復讐思想）と言いまして、
「生命には生命をもってこれに代えろ」
ということ。だから、殺人したら、それは殺されるのが本当なんだ。殺人犯がこの頃はだいぶ軽くみられているけれども、あれはどうかと私は思う。いろいろな事情があるから、一概にはただ現象だけではいえないでしょうけれども、何かちょっと軽すぎるように思う。ラテン語で
「レックスタリオーニス」「復讐法」
という。ところが、キリストは我々の罪に対して何をもって代えたかというと、彼の義をもって代えた。
「お前の罪は私の義と交換するよ」
と。これが贖いなんです。我々の我執というものをキリストの義と交換した。

キリストは神さまに完全に従うところの義です。義とは神の意志に完全に従って、己無き世界です。「奴隷意志論」とルターが言ったのがこれです。自分が奴隷となったときに、相手が絶対者だから、その奴隷は本当の自由を持っていることになる。自分の自由に死ぬと本当の自由がやってくる。そんな自由は普通は知らん。そこが、無の世界が無限無量という楽な世界、天衣無縫の世界なんです。

「罪に対する償いを倍にして返した」

ということは、イザヤ書40章、エレミヤ記16・18、同17・18、出エジプト記22・4、詩篇137・8にもでている。

●魂を売る

7かれが自ら尊び、みずから奢りしと同じほどの苦難と悲嘆を与えよ。彼は心のうちに「われは女王の位に坐する者にして寡婦にあらず、決して悲嘆を見ざるべし」と言う。8この故に、さまざまの苦難一日のうちに彼の身にきたらん、即ち死と悲嘆と饑饉となり。彼また火にて焼き尽くされん、彼を審きたもう主たる神は強ければなり。9彼と淫をおこない、彼とともに奢りたる地の王たちは、其の焼かるる煙を見て泣きかつ歎き、10その苦難を懼れ、遙かに立ちて「禍害なるかな、禍害なるかな、大いなる都、堅固なる都バビロンよ、汝の審判は時の間に来れり」と言わん。

「禍害なるかな、ローマよ、東京よ」ということ。いつやってくるか分からんと。

11地の商人かれが為に泣き悲しまん、今より後その商品を買う者なければなり。12その商品は金・銀・宝石・真珠・細布・紫色・絹・緋色および各様の香木、また象牙のさまざまの器、価貴き木、真鍮・鉄・蝋石などの各様の器、13また肉桂・香料・香・香油・乳香・葡萄酒・オリブ油・麦粉・麦・牛・羊・馬・車・奴隷および人の霊魂なり。

これは衣食住が全部出ているな。「人の霊魂」には困ったものだ。そういうものを商売にしている。「霊魂」は「プシヘー」という字が書いてある。人の心まで全部売り物だ。普通の商売というのは非常に打算的なものです。信仰の世界は打算はダメです。商売は正直に薄利多売がいいのではないですか。儲けようと思ってはダメだ。なるだけ安くして多く売ると、みな喜ぶ。段々値をせりあげていくから、お互い苦しくなる。段々下げていけばいい。

商売する人は大いに儲けていいですよ。問題は、その金をどう使うかなんです。その金を私利私欲に使ったら地獄往きになる。可哀相な人のために、善きことのために、いくらでも使い方がある。次の世界に行くときには、お札一枚持っていくことができない。天国には、持っていったって何もならない。藤井先生は亡くなられた時には、財布の中は空っぽだったという。借金もなければ貯金もない。大したものだね、藤井先生というのは。江戸っ

子は宵越しの金を使わないという。藤井先生の全集がお子さんの養育費になってしまった。本当に生きた人というのはそんなもんだ。

人はいろいろな生活のしかたがありますが、要するに、我執があるようなやり方、打算的なやり方をしていれば、それは行き詰まる。それはバビロンになる。バビロンの民になってしまう。我々は天のエルサレムの民にならなくては。

「魂を売る」というのは、ある一つの面では、貞節観念がなくなることでしょうね。それの一つの著しい現象がその「淫」「ポルネー」というやつです。

14 なんじの霊魂の嗜みたる果物は汝を去り、すべての美味、華美なる物は亡びて汝を離れん、今より後これを見ること無かるべし。15 これらの物を商い、バビロンに由りて富を得たる商人らは其の苦難を懼れて遙かに立ち、泣き悲しみて言わん、16「禍害なるかな、禍害なるかな、細布と紫色と緋とを著、金・銀・宝石・真珠をもて身を飾りたる大いなる都、17 斯くばかり大いなる富の時の間に荒涼ばんとは」而して凡ての船長、すべて海をわたる人々、舟子およよび海によりて生活を為すもの遙かに立ち、18 バビロンの焼かるる煙を見て叫び「いずれの都か、この大いなる都に比ぶべき」と言わん。19 彼等また塵をおのが首に被りて泣き悲しみ叫びて「禍害なるかな、禍害なるかな、此の大いなる都、その奢によりて海に有てる人々の富を得たる都、かく時の間に荒涼ばんとは」と言わん。

これは終末的な時です。いつくるか分からん。地震がいつくるか分からないと同じように。

20 天よ、聖徒・使徒・預言者よ、この都につきて喜べ、神なんじらの為に之を審き給いたればなり』

力強い言葉だね。先ず、天に向かって言っている。聖徒・使徒・預言者よ、お前たちを迫害した、あるいはその先輩を迫害したこの町がとうとう審判にあってしまったと。けれども、手放しに喜んでいるわけにはいかない。我々は、現代文明の、現代文化の責任の一端を負っている。いくら選ばれた者であろうと、聖徒であろうと、連帯責任を負っている。

●百行一死に如かず

学校でも、中学生が先生を殴ったり、ヘタすると棍棒で半殺しにしてみたり、とんでもない事が起きるものな。こんな事は私たちの少年時代には考えられない。先生に対して絶対だったからね。随分、世の中は変わったものだ。けれども、何も少年が悪いわけではない。そのような少年が出るようにしてしまった教育界、親、社会、すべての連帯責任の現象が子供たちに表れている。先ず、己が身からかかっていかなくては。

「こうしろ、ああしろ、ここが悪い」

ではない。範を垂れなくてはいかん。率先垂範という言葉がある。先にたって範を垂れる。

言わず語らずのうちに、

「ああ、あの先生の在り方には、心には参りました」

と。最大の言葉はやはり行為なんです、実存そのものです。いわゆる信仰ではない。信行ならまだいいけれども。

「始めに行為あり、終りにまた行為あり」

と言いたいわけです。行為が言葉です。

「キリストの十字架の言葉」

というのは、十字架という驚くべき行為が言葉なんです。無言の言なんです。言行一致なんて言う必要はない。行だけでたくさんだ。

「百言一行に如かず」

百の言葉は一つの行為にかなわない。

「百行一死に如かず」

百の行為も一つの死にかなわない。死が、人のために死ぬことが最大の行為です。

「ひとその友のために生命を捨つる、これより大いなる業はない、愛はない」

と。キリストはその死を十字架で死んだ。地の果てまでも世の末までも、このキリストの十字架という死の行為は力を持っている。新天新地がくるまで。本当に参ります。だから、キリストの十字架の贖いの死のあとに、何が来るかというと、

「祈って待っていろ、聖霊がくるぞ」

と。これは何ものとも代えられない。これがペンテコステではないですか。これを受けないで、何がクリスチャンかと言うんだ。私は何も弁解しません。ただ、そういうことを告白するだけです。

●世界は滅びたり

21 **ここに一人の強き御使、大いなる碾臼（ひきうす）のごとき石を抬（もた）げ海に投げて言う**

『おおいなる都バビロンは斯のごとく烈しく撃ち倒されて、今より後、見えざるべし。

凄い言葉だね。第三次戦争が来たら、この通りだよ。冗談じゃないね。アメリカとソ連の親玉たちが何のかんのと話し合いをする。あんなものはただ局部的な上辺的なものだけです。陰で何をしているかわからん。

「本当に人を愛するならば、世界を愛するならば、イデオロギーを乗り越えようではないか。人間として、責任者として本当に握手しようではないか。もう原爆なんか造るのはよそうではないか」

と、そういう交渉がなぜできないか。人間ほど馬鹿げた愚かな存在はない。人間の方がサタンよりか悪いのではないかな。サタンの悪智慧以上だ。

「バビロンは倒れたり」どころではない。

「世界は滅びたり」

なんです。もう滅びているんです、ある意味において、現に。ただ、それが現象していないだけのはなしだ。今の世界の現状は、どんなにきらびやかに見えても、逆に滅びの現状なんだ。経済大国なんていって、日本は驕っていたってダメです。魂はドロで汚れている。

「汝の足を洗わずば、われ汝と関わりなし」

とキリストが言っている。キリストやお釈迦さんが出てきたわけですよ。それでもどうにもならない。大慈悲だの、絶対恩寵を拒んでいるというと、羔の怒りがくる。おしまいだ。深く世界のために祈ってごらん。どういうことになるか。

「禍害なるかな、禍害なるかな、大いなるバビロンは滅びたり」

と。「滅びてある」という現在の形になってしまう。

「そのうちに滅びるかもしれない」

ではなくて、

「現実に滅びている」

のです。キリストの十字架を無みしている。お釈迦さんの大慈悲をいい加減にとりあつかっている。

それは人間には、相対的な善はいろいろなところで表れていますよ。全部、善が無くなったとは言ってません。相対的な善もいろいろあります。けれども、もう一つ次元の違った世界にいくというと、どうにもならなくなっている。これが終末の預言なんです。聖書は恐ろしい本だよ。いい加減にとりあつかったら、自分がいい加減になるだけのはなしだ。

22 今よりのち立琴を弾くもの、楽を奏するもの、笛を吹く者、ラッパを鳴らす者の声なんじの中に聞こえず、今より後さまざまの細工をなす細工人なんじの中に見えず、碾臼の音なんじの中に聞こえず、23 今よりのち燈火の光なんじの中に輝かず、

非常な暗黒のことを叙している。

今よりのち新郎・新婦の声なんじの中に聞こえざるべし。そは汝の商人は地の大臣となり、諸種の国人は、なんじの咒術に惑され、24 また預言者・聖徒および凡て地の上に殺されし者の血は、この都の中に見出されたればなり』

非常にはっきりと書いてある。もう黒白がはっきりする。義のために愛のために流された、いかなる一滴の血も涙も無駄に流されたのではありません。私は凄い天国篇を書くからね。